

南信州地域伝統野菜の生産安定

■背景とねらい

管内の信州の伝統野菜は令和5年3月時点で、県下で最も多い27品目が選定され、うち伝承地栽培認定されている野菜は15種類である。これらの生産安定に取り組んだ。

■本年度の取組と成果

令和4年も、各伝統野菜が持つ本来の形質が維持できるよう活動に取り組んだ。

11月25日に飯田市千代において、JA全農長野県本部の技術審議役を講師に、ヒガンバナ科（ネギ）の伝統野菜を対象とした採種指導会を開催した。千代ネギ、駒屋ネギ及御所ネギの生産者ら20名が参加した。

生産者による現状報告に続いて、講師による「伝統ネギの形質安定に向けた採種について」と題した座学講座を受講した。

その後、千代ネギの展示ほ場に移動し、現場を見ながらネギ採種の考え方、方法、注意点などを学んだ。

座学による理論習得と現地実践ほ場を目の当たりにしながらの指導会となったことから、参加者の理解もより深まった。



ヒガンバナ科伝統野菜の現地採種講習会

■今後の課題と対応

伝統野菜の形質安定を図るため、次年度はアブラナ科野菜（ダイコン及びカブ）を主体に生産者や関係者と連携して活動に取り組む。

（技術経営係：吉川 昭）

下栗芋の安定的な種芋生産の取組（飯田市）

■背景とねらい

下栗芋は、アブラムシ類が媒介するウイルス感染により収量低下が課題となっている。

そこで、安定生産のためウイルス感染の少ない種芋の生産に取り組んだ。

■本年度の取組と成果

1 健全な種芋生産の啓発

6月14日に野菜担当とともに10ほ場、ワクチン接種株生育調査1ほ場の巡回、状況調査を実施した。今年度はウイルス感染しているほ場が多くみられ、健全な種芋を生産するため啓発チラシの配布及び指導を行った。

3月11日には、全生産者を集め栽培講習会を開催し、健全株の茎葉処理やアブラムシ防除について指導した。

2 ワクチン接種株を用いた現地試験

上村の育苗網ハウス2棟において、5月の定植から8月の収穫まで2週間間隔で状況確認を行った。今年度は、凍霜害の影響により定植後地上部が枯れたため、再度茎葉を発生させた。このことにより、収穫時には芋の収量が少なくワクチン接種の有効性は確認できなかった。



ワクチン接種株の定植の様子

■今後の課題と対応

ウイルス感染を防ぐため、茎葉処理やアブラムシ防除を啓発していたが、高齢化により傾斜地での作業が困難となっているため、現状に即した防除の検討が必要である。

（地域第二係：堀 琴音）

千代ネギの生産振興(飯田市)

■背景とねらい

「千代ネギ」は、飯田市千代地区で信州の伝統野菜伝承地栽培認定を受けている。その生産者団体である「千代ネギの会」では採種と生産・販売に取り組んでいるが、ほとんどの会員が自家消費のみの栽培であり、販売量が少なく飯田地域での知名度が低いことが課題である。そこで、令和4年度は採種指導会の開催、加工品の生産、管内の商談会へ参加し、生産安定と販路確保に向けて活動した。

■本年度の取組と成果

1 栽培指導

モデルほ場を設置し、会員の共同作業で栽培から収穫までの一連の作業を行った。

採種技術の向上を目的に、11月には伝統野菜ネギの採種指導会を開催した。JA全農長野技術審議役に講師依頼し、座学とモデルほ場での採種指導をした。

2 地域内での知名度向上に向けた取組

南信州うまいもの商談会への出展や、南信州地産地消推進協議会主催の生産者・実需者交流会での情報交換による販路拡大に取り組んだ。知名度向上のため、飯田ケーブルテレビの取材を受けた。また、民間加工業者と連携し「千代ネギ」を使用したネギダレを作成した。直売所等で販売をし、知名度の向上を目指している。

■今後の課題と対応

今年度はコロナ禍により中止していた商談会に参加できたことや、メディアへの露出など知名度向上に向けた取組みを積極的に行っている。しかし、会員の高齢化や会員数の減少により直売所への出荷が難しくなっていることや、出荷量が確保できず取引に至らないことがある。今後は栽培に係る組織体制を改善し、育苗等にかかる個人の負担を減らすことで生産安定につなげたい。

(地域第二係：内田 牧歩)

清内路伝統野菜保存会の活動支援(阿智村)

■背景とねらい

阿智村清内路地区では、平成23年に「清内路伝統野菜保存会」が発足した。採種事業による形質維持や共同栽培による生産振興に取り組んでおり、これまでに5作目が信州の伝統野菜に選定され、うち4作目が伝承地栽培認定を受けている。

このうち、支援センターでは「清内路かぼちゃ」と「赤根大根」について、村や保存会と連携し、支援を行った。

■本年度の取組と成果

1 清内路かぼちゃの非破壊糖度計による分析精度の向上支援

非破壊糖度計を活用した糖度測定の精度向上を図るため、Brix糖度計の測定値との相関を調査した。昨年度までに81検体を調査しているが、精度を向上させるため、今年度新たに15検体の調査を実施した。分析結果をもとに相関式を割り出し、11月11日に開催された保存会の反省会において情報提供を行った。

2 赤根大根の販路拡大

これまで地元の漬物業者と取引があったが、コロナ禍の影響で取引が減少し、販路が課題となっていた。そこで、中山間地域農業新需要創出事業を活用したところ、安曇野市の漬物業者と新たに取引を開始した。

■今後の課題と対応

清内路かぼちゃは、先枯れ症状による収量の低下が課題となっている。原因は近親交配による「自殖弱性」の可能性が大きい。そこで、令和4年度に採種した種子と先枯れ症状の発生が少ない数年前の保存種子による交配試験を実施し、形質及び先枯れ症状の有無を確認していく。

赤根大根は、栽培指導を実施することで、生産安定を図り、取引が継続できるよう支援していく。

(地域第三係：坂口 冬樹)

鈴ヶ沢伝統野菜の良質苗の確保支援（阿南町）

■背景とねらい

阿南町和合地区で栽培されている信州の伝統野菜である「鈴ヶ沢なす」、「鈴ヶ沢うり」、「鈴ヶ沢南蛮」の苗生産を一昨年から担う農家に対して、発芽後の生育を揃えるための管理技術の習得について支援を行った。

■本年度の取組と成果

1 品目ごとの適温

なす、うり、南蛮はそれぞれ発芽や生育の適温が異なるが、育苗管理は同一ハウス内で行わざるを得ない。とりわけ、なすについては発芽を揃えるために変温管理を行わなければならない、他の品目と分けて管理する必要がある。

2 品目ごとに小トンネルを設置

これまでは育苗ハウスに設けた小トンネル内で3種類の伝統野菜を同一温度で管理していたため、予定した時期に苗を配布することが難しかった。そこで、品目ごとに小トンネルを設けて、それぞれの生育にあわせた開閉を行い、適温で推移するようこまめな管理を心がけた。

その結果、それぞれの品目の生育が揃い、おおむね予定した時期に予定した生育ステージの苗を配布することができた。



発芽が揃い、子葉が展開した鈴ヶ沢なす

■今後の課題と対応

栽培期間長期に及ぶ果菜類にとって良質苗の供給は重要な課題である。多くの伝統野菜は生産者が減少しているが、収量品質を安定させるため良質苗の確保を支援する。（阿南支所：樫山 岳彦）

源助蕪菜の生産振興（泰阜村）

■背景とねらい

源助蕪菜は、信州の伝統野菜の伝承地栽培認定を受けており、村の振興品目の一つになっている。野沢菜と比較して収量が少なく、十分な寒さにあててからの収穫になるが、それまでに漬物出荷規格に適合する生育を確保する必要があり、播種時期の見極めが難しく、なかなか生産量が増えないことが課題の一つである。

■本年度の取組と成果

1 pH、EC 測定による、適正施肥の推進

役場と連携し、播種前と追肥適期前に全ほ場を巡回し、pH と EC を測定し、元肥や追肥の目安を示した。農家からは、参考になるという反応が得られた。

2 播種時期をずらしたモデルほ場の設置

役場と連携し、播種日を3回に分けたモデルほ場を設置した。今回のモデルほ場では、いずれの播種日も出荷規格に適する生育に達しなかったことから、参考になる結果は得られなかった。

3 飯田女子短期大学との連携支援

村と包括協定を結んでいる飯田女子短期大学との栽培作業の体験受け入れ支援とあわせて、同校へレシピの開発等を依頼した。その結果、源助蕪菜を使ったパンが商品化され、飯田市内のパン屋で販売された。

4 収穫体験イベントの開催支援

コロナ禍の影響で過去2年間実施されなかった「収穫と漬け込み体験イベント」を、11月23日・24日に収穫体験に絞って開催し、運営を支援した。

■今後の課題と対応

南天の収穫時期と重なってしまうことから、栽培を中止する農家があり、このことも生産量の減少の一因となりつつある。今後は、新規農家の掘り起こしなどを支援していきたい。

（阿南支所 原田 広己）

ていざなすの生産振興（天龍村）

■背景とねらい

令和2年にナス青枯病、令和3年にフザリウム属菌によると考えられる萎凋症状が一部で発生した。

土壌病害に対応する栽培方法を提案するとともに、モデルほ場を設置してその実証に取り組んだ。

■本年度の取組と成果

- 1 実証に取り組んだ土壌病害対策
 - (1) エンジン付きオーガを用いた2mごとの排水穴の設置による排水対策
 - (2) 耐病性品種（トナシム等）の高接ぎ木栽培
 - (3) 高畝栽培
 - (4) 白マルチ、竹チップやキノコの廃菌床のマルチによる地温上昇抑制

2 本年の発病状況

本年も萎凋症状が8月下旬から出始めて、次第に拡大していった。

萎凋株5株を県野菜花き試験場に同定を依頼したところ、全株がナス半身萎凋病であった。



11月22日のほ場(発病状況)

■今後の課題と対応

村内の一部ほ場では、ナス半身萎凋病のほかナス青枯病と思われる発病もあった。

土壌病害対策に共通する優良有機物の施用や排水対策などをさらに徹底するよう取り組みたい。

(阿南支所：西嶋 秀雄)

志げ子なすの生産振興（喬木村）

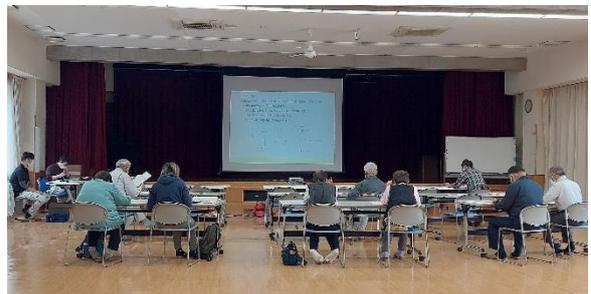
■背景とねらい

「志げ子なす」は平成27年度に信州の伝統野菜に選定された大型のなすで、令和4年には伝承地栽培認定を受けている。生産者の栽培管理技術の向上と次代への安定した種子供給のため、栽培指導会および採種指導会を開催した。

■本年度の取組と成果

1 栽培指導会の開催

5月12日に苗の配布に併せて栽培指導会を実施した。栽培者約10名が参加し、基本的な栽培管理や種取りについて講習を行った。今年は苗が小ぶりのため、定植前に育苗して苗の大きさと根張を確保するよう指導した結果、生育不良等の問題は無く、安定した生産の維持につながった。また、今年度は新たに村内の小学校・保育園で栽培され、食育活動を通じて村内での認知度向上に繋がった。



栽培指導会の様子

2 採種指導

10月19日に採種指導会および生産者会議を開催し、採種農家2戸を中心に改めて採種の方法、手順について確認した。また、中山間地域農産物橋渡し支援事業により実施した食味分析の結果を報告したところ、高い関心が寄せられた。

■今後の課題と対応

安定的な系統維持に向けた採種指導に取り組む。

加えて、来年度は組合が独自で果実の大きさ別の食味分析に取り組む予定であり、サイズごとの食味食感等の特徴を踏まえたPR方法を検討する。さらに分析結果の活用、認知度向上や販路拡大に向けた支援に取り組む。(地域第一係：倉科 妙香)

環境にやさしい農業の推進

■背景とねらい

農林水産省は、「みどりの食料システム戦略」の中で2050年度に有機栽培面積のシェアを25%にする目標を明記している。

そこで、支援センターでは、認証制度の周知や有機農業に関する情報提供を行った。

■本年度の取組と成果

1 認証制度

「信州の環境にやさしい農産物認証」について、令和4年度は54件の申請があったが、1件が辞退し、53件の合格となった。

「エコファーマー」について、新たに取り組む農業者や継続取得希望者に支援を行った結果、43名がエコファーマーを取得した。

2 有機農業推進アドバイザーの活用

県では、有機農業の先進的実践者を「有機農業推進アドバイザー」として登録し、有機農業を志向する者からの相談に対応できる体制を整備している。今年度、管内の女性団体2団体が事業を活用し、「緑肥の活用方法」や「米ぬか主体のぼかし肥料づくり」について講習を受けた。



有機農業推進アドバイザーによる講習

■今後の課題と対応

環境問題への意識の向上から環境にやさしい農業に取り組む者は増加傾向にある。各種認証制度の周知及び支援と、有機農業に関する情報提供を継続して行うことで、持続的な農業に取り組む面積の拡大に努めていきたい。

(地域第三係：坂口 冬樹)

「南信州ゆうき人」の活動支援

■背景とねらい

「南信州ゆうき人」は飯田市を中心とした南信州地域の有機農業者のグループである。新規就農者の参画も多く、有機農業の担い手として重要な役割を果たしている。

支援センターでは、グループの活動支援や栽培技術についての情報提供を行った。

■本年度の取組と成果

1 定例会等の開催支援

毎月開催される定例会では、会員同士の生産販売に関する意見交換や、組織としての活動についての検討が行われている。支援センターでは、定例会がより充実した内容になるよう、「カットブレイカーの活用による排水対策」や「環境にやさしい農業における緑肥の活用」等、栽培技術に関する情報提供を行った。

2 土づくり講習会

分析会社の協力を得て、会員ほ場の土壌分析を行い、4月と1月に土づくり講習会を開催した。講習会には会員13名の出席があり、分析結果に基づいた土づくりについて活発に質疑が行われた。



土づくり講習会の様子

■今後の課題と対応

地域内でも有機農業への取り組みが活発となっている。今後も会の活動支援や栽培指導・情報提供を継続していき、管内の有機農業の取組拡大につなげていきたい。

(地域第三係：坂口 冬樹)

「阿智ゆうきの風」の活動支援 (阿智村)

■背景とねらい

阿智ゆうきの風は、阿智村を中心として有機野菜栽培を志向する農家が会員となり、会員相互の交流を通じて、栽培技術の向上や安定生産を図っている。

有機農業に関する情報提供や、会員が抱える課題の解決に向けた支援を行った。

■本年度の取組と成果

1 定例会等の開催支援

定例会は1か月に1回程度開催され、会員同士が自身の生産販売に関する近況報告を行うことで、課題解決に向けた意見交換を行っている。

当支援センターでは、有機栽培に関する情報や地域の気象状況、野菜の生育状況等の情報提供を行うとともに、それぞれの課題に対し助言し、定例会の充実を図った。

2 講習会&講演会の開催

阿智ゆうきの風が後援となり「菌ちゃん元気畑講習会&講演会」を開催した。講習会には、県内外から60名を超える参加があり、有機農業の一栽培方法について知る有意義な会となった。



講習会の様子

■今後の課題と対応

ほ場巡回や産地視察等、会の活動支援を継続し、有機農業の推進を図っていく。

(地域第三係：坂口 冬樹)

有機栽培の定着支援（松川町）

■背景とねらい

松川町では、令和元年より遊休荒廃地を活用した有機栽培を振興しており、生産された農産物は町内の学校給食へ提供されている。令和2年にはこの取り組みの実働を担っている生産者が、ゆうき給食とどけ隊を結成した。

有機栽培の技術指導を（公財）自然農法国際研究開発センターが担い、月1回のほ場巡回等を通じ生産者の技術力向上が図られている。

支援センターでは、有機栽培の理解が進み生産者の増加につながるようサポートを実施している。

■本年度の取組と成果

1 栽培技術の確立支援

(1) 水稻の栽培試験の調査協力

有機米の増収に取り組む生産者に対し、自然農法国際研究開発センターと協力して、課題解決の試験調査を支援した。具体的には、栽植密度の違いによる雑草抑制と増収効果の検討で、坪あたりの50株植えて効果が高かった。

(2) プロジェクト発表への誘導

上記試験の結果について、青年農業者活動成果発表会でのプロジェクト発表を支援した。発表会において南信州代表に選出され、県の若人のつどいでのプロジェクト発表を行った。審査の結果PALネットながの会長賞を受賞することができ、研究成果とともにゆうき給食とどけ隊の取り組みの一部をPRすることができた。

(3) 小麦の有機栽培支援

小麦生産希望者3名に対し、栽培方法の講習と飯島町の先進農家視察を企画した。内1名が有機栽培による小麦生産を開始した。

■今後の課題と対応

県には有機栽培の普及技術がなく技術支援が難しいが、広く情報収集を行うとともに関係機関と協力した支援を今後も行っていく。

(地域第一係 木下 倫信)

GAPの推進及び認証取得に向けた活動支援

■背景とねらい

GAPの実践は、作業者の責任感の向上や整理整頓による作業時間の削減等、経営改善につながる。当支援センターでは、11名がJGAP指導員資格を取得している。そこで、支援対象者を選定し、個別指導を実施した。

■本年度の取組と成果

1 GAPを「知る」、「する」の取組

GAP実践希望者や就農5年目までの新規就農者等、13名を支援対象者とし、個別巡回により「知る（GAPの概要説明）」と「する（実践指導）」を支援した。

2 国際水準GAP認証取得に向けた支援

JGAP認証取得を希望する1経営体に対し、「JGAP農場用管理点と適合基準」に基づき帳票類の作成支援やリスク評価の方法、ほ場周辺及び施設内の改善事項の助言等を行った。12月に審査機関の審査を受け、是正完了報告をし、2月に無事認証取得となった。



JGAP認証審査の様子

■今後の課題と対応

国際水準GAP認証の取得は、ゴールではなくスタートである。GAPの実践は継続することに意味があるため、次年度以降もリスク評価やほ場周辺及び施設内の改善支援を行っていく。

また、認証取得には至らずとも、GAPを実践する経営体が増えるよう、支援を継続していく。

(地域第三係：坂口 冬樹)

6次産業化の推進

■背景とねらい

6次産業化サポート事業の支援対象として、天龍村の農産物加工事業者が令和3年度で支援対象を満了したため、農産物加工の課題解決について、課題解決のアフターフォローを行った。

また、新たに6次産業化サポート事業を希望する事業者に対して個別相談を行い、支援対象者登録に向けた支援を実施した。

■本年度の取組と成果

1 6次産業化サポート事業の「支援終了者」に対するアフターフォロー

支援対象者となった天龍村の農産物加工事業者は、既存商品のオンリーワン化や絞り込み、の検討を行ってきたが、一部商品で回復の兆しが見え始めたので原材料の確保対策等生産力強化の取り組みを開始し、これに対して助言等の支援を実施した。

2 6次産業化サポート事業を希望する事業者に対して個別相談

飯田市の農地所有適格法人が自社生産の野菜を使用した「農産物加工施設」の整備を検討しており、次年度に6次産業化総合化事業計画の認定を視野に入れ、6次産業化サポート事業の重点対象者として、信州6次産業化推進協議会と共に支援してゆく。

飯田市の農業法人が自社生産の野菜を漬物加工する加工所の建設を目指していて、その対応も農業農村振興課が中心となってあたってきた。

次年度、6次産業化サポート事業対象者になるよう条件整備を進めている。

■今後の課題と対応

6次産業化を目指す農業者に対しては、次年度も個別相談会を開催し、個々の課題に対応した支援を行い、6次産業化総合化認定事業者のフォローアップをしてゆく。

(地域第三係：中村 武郎)

食味分析を活用した伝統野菜なすのPR方法の検討

■背景とねらい

伝統野菜は、食材としての特徴の大半は個人の調理経験や感想、先人からの伝承等に基づくものであり、客観的な表現が難しい。

そこで、伝統野菜なす3種類について、調理後に味覚認識装置を用いて食味を分析し、品種それぞれの特徴を数値化、言語化、見える化することにより、販売上のPRや新たな食材として活用してもらうことで「信州の伝統野菜」の付加価値向上を図る。

■本年度の取組と成果

1 伝統野菜なす3種類の味覚分析

伝統野菜「ていざなす」、「鈴ヶ沢なす」、「志げ子なす」を一般品種の「千両二号」と比較し、蒸し・茹で・揚げといった調理方法の違いによる味覚分析を実施した。

2 情報交換会の開催

南信州・飯田産業センターと共催し、「信州の伝統野菜」産地情報交換会をエス・バードにて開催。生産者と意見を交わし、今までPRしていた特徴の客観的評価の裏付けとして味覚分析結果を用いて農産物の強みに変える表現を検討した。



2月14日の情報交換会の様子

■今後の課題と対応

分析結果だけではなく、官能評価を行い生産者とともに表現を検討し消費拡大につながるようFCPシート作成を支援していく。

本取組みは、中山間地域農業新需要創出事業を活用している。（地域第二係：堀 琴音）